日中友好経済懇話会視察交流ツアー(2005．3．24～29)レポート

中国浙江省３都市（紹興、寧波、杭州）訪問記　　京都市会議員 **山本正志**

今回の参加は総勢２２人、団長の大森経徳氏は住友銀行のＯＢで、退職後、中国国内を５万 km 以上も旅行してきたという専門家。顧問の大西広教授は京大上海センター副所長。参加者は大学教授、弁護士、会社経営者などで、立命館大学の向井俊彦先生、産経新聞正論欄でおなじみの木村汎拓殖大教授夫妻も。日中友好経済懇話会は日中友好と経済交流、両国の経済発展と会員の繁栄をねがう組織で、会員は主に京都の企業経営者、私も会員。訪問先は、中国・浙江省で（省都・杭州）、長江(揚子江)の南側に広がる中国有数の穀倉地帯。

紹興は、紹興酒の本場、「東洋のベニス」とも呼ば　れる水の都で、市面積の 10%は運河。中国の国民的文豪魯迅の生誕の地としても知られている。
また、紀元前はるか昔の春秋時代、呉王夫差との戦いに敗れた越王勾践の「臥薪嘗胆」の故事でも有名な地でもある。現在、福光町、芦原町(福井)、西宮市と友好都市関係にある。
寧波は、「小上海」といった雰囲気をもつ港町。イキのいい海産物、港近くには客船・小船がひしめき合い、市内を流れる数本の川が寧波の穏やかな風情を作り出している。日本との結びつきの深い町で、現在、長岡京市と友好都市関係(他に益田市とも)。
杭州は、「上有天堂、下有蘇杭」（天に極楽があるように、地上には蘇州・杭州がある）と詠われたほど美しい『地上の楽園』の異名を持つ町。西湖を中心にした杭州の景勝地は中国華東地区屈指の古都。日本人租界が日本敗戦(1945 年)まで続いた歴史もあり、現在、向日市と友好都市関係(他に福井市・岐阜市)にある。
紹興・杭州・寧波の３都市を含む上海・江蘇・浙江で構成される地域は対中進出企業のほぼ半数が集中する産業集積地域で、なかでも、杭州と寧波は近年外資企業が急速に集中するようになった地区。

＜中国は社会主義か?中国は脅威か?＞

今回の視察旅行参加は私自身の「どうしても現場の中国をみておきたい」という問題意識から大西広先生のお誘いもあり、3 月予算議会も終わったことでもあり、決断したものだった。予備知識としては「メイドイン・チャイナ」(黒田篤郎)や「中国経済ハンドブック 2004」なども一読してはいたが、結論からいえば「百聞は一見にしかず」。
最近の中国にかんするニュースをみても、
☆「対中貿易、対米を逆転。日本と中国の間の年間貿易額が 2004 年に日米間の貿易額を逆転。対米貿易が 20 兆円とみられるのに対し、対中貿易は 21 兆円に迫る。日本の最大の貿易相手国が米国から中国に代わる」。
☆日経リサーチコンサルタント徐向東氏は NIKEIRESEARCH-REPORT2002-Ⅲで「世界の工場から巨大消費市場へ　三大都市圏を代表とする都市圏消費市場の形成と都市新中間層の台頭」を指摘している。
☆関満博一橋大教授はかつて日経新聞で(2001-12-24)「日本人の心の中に、中国はうまくいくわけがない。うまくいっては困る。などの複雑な感情がひそんでいる。まず中国の中に果敢に踏み込むことである」と書いていたが、日本の産業の土台を支える中小企業(特に京都の)の今後の発展のためにも今回の視察は刺激的なものであった。

３月２４日　第一歩は紹興　午前１０時３０分、関西空港から杭州空港行きのＡＮＡ直行便に搭乗、

約２時間少しで到着。大西広先生は一足先に中国で黄山登山に挑戦して杭州空港で合流。
　早速バスで中国紹興黄酒集団・古越龍山紹興黄酒有限公司を訪問。「古くは２４００年前に酒を造ったという記録がある」という紹興黄酒の老舗。利き酒をして古越龍山紹興黄酒を１本いただく。紹興酒は年代ものほど高級になるといい「５０年ものもある」という。お米の投入から巨大なタンクのなかで泡がうかび，お酒になる様子を見学。
　次に、紹興市外事弁公室・国際交流服務中心（サービスセンター）訪問。富山・福井の商工会と連携して若い工人（技術者）を研修に派遣する事務の窓口。国際交流服務センターは日本へ技術研修生を派遣しており、受け入れ企業は鉄鋼業、建築業、食品業、機械部品加工業、家具木製品加工業、アルミ加工業、型製造業、染色、縫製業など。研修事業のために、研修生の選抜、訓練、管理の事業に取り組む。
　近くの紹興飯店ホテルに歩いて到着、その足で再び紹興市外事弁公室会館へ行き、紹興市の副市長の兪永谷氏らの歓迎をうけ、双方代表が挨拶。記念の写真集を贈られる。その足で再びホテルに戻って日本ミッションの歓迎会。
　私の席はなんと兪副市長の隣。「京都は近代産業発祥と大学、宗教寺院のまち。京都市会では共産党は自民党についで２０議席」と自己紹介。とにかく酒は紹興酒で乾杯となったが、兪副市長の発声は「イッキ！」。次々とえらい人が隣にきては名刺交換で「イッキ！」となった。

紹興飯店ホテル

　町の第一印象は「どんどんと新しい街区が造られており、発展しつつある工業都市」というイメージ。自家用車よりトラック、バスが多く、次々と住宅建設が進められている。
　大森副団長の解説「大掛かりな工業団地を着々と進めており、今や４ない（人手、電気、土地、水）の状態になりつつある」とのこと。もちろん紹興市側の各人はケータイは必需品。紹興飯店ホテルは市内で最高級のホテルで、丁度紹興市人民代表大会の開催中ということでホテルには「熱烈歓迎」といった横断幕と黒塗りの乗用車が並び、ベンツも。

歓迎晩餐会で兪副市長と

３月２５日　昨日までで持参した４０枚の名刺が底をついた。中国の人は名刺が好きだと聞いたが、とにかく会うとはじめに名刺交換。朝、フロントに行って「名刺作成をお願いしたい」と言うと、立命館大の向井俊彦先生も「私も」とつき合ってくれた。夕方ホテルに帰ってフロントで受け取ると、急な依頼だったが５０枚で２０元（２６０円）というから安い！
　一年の半分を大連で暮らすという大阪の弁護士の稲田さんは「私の事務所の名刺は全部中国で作りますよ。安いからね」という。
　午前中は紹江工業区管理委員会ビルで李局長の説明を聞く。大森副団長の話によると最近では中国でも沿海部は開発がすすみ、「効率の悪い企業に対してはNO！THAK-YOU」ということになっているらしい。特に発展性のある企業の進出を求めていることが話の端々にうかがえる。中国の行政区は省－市－県とされているが、紹興市は中央政府から開発区のお墨付きをもらっており、開発中の工業地区はどこでも建設ラッシュ。

　次の訪問は西宮市から進出した「漬新」現地工場。１９９２年に大連に現地工場を設立、その後紹江工業区に進出。話を聞くと、蕪や梅干や紫蘇の漬物を生産し日本の食品マーケットに送り出しているということで、セブンイレブンやチェーン店、機内食、弁当屋などに広げているということ。工場では現地女性たちが梅干の種を抜き、袋詰の作業を黙々としていた。
　道を走っているのは自動車とともに自転車が多いが、シクロと呼ばれる３輪自転車タクシー、またバイクも多く、圧倒的に電動バイク。これなら公害もなく音もなく、しかも深夜の電力に余裕のある時間帯の充電だから発電所にも負担にならない。街中を走行するならこれで十分。中国のほうが環境対策は進んでいるのでは、と感心した。帰国して市会議員団で藤井議員(元自動車整備工)に聞くと「バッテリーの生産では中国の方が進んでおり、日本の技術は遅れている。じつは自動車用バッテリーを大手自

動車会杜へ納入している N 電池は原価割れ販売となっており、『いやなら中国から性能・価格の面で良質な製品が輸入できる』といわれている」という。

昼食は李局長を招待して「魯迅が通った」という咸亭酒店で。その後は市内観光。欄亭へとむかう。ここには書家王義之の墨蹟で有名。しかし彼の書はこれを所有する皇帝の死でともに埋葬されてお目にかかれない。したがって現存するのは、彼の書を移した後代の書家の手本があるだけ。西安に有名な碑林があったが、著名な書家の墨蹟を石碑に刻み込んだもので、科挙の試験の素材となったということで若い人たちの訪問が絶えることがなかったという。しかし今の中国は略字を公用として採用し、教育でも公用語としても、日常はこれを使用している。

次の訪問は、越王勾践が敗北して臥薪嘗胆でリベンジを果たしたという越王殿と、魯迅の住居と記念館訪問。ホテルに帰って夕食は日本側参加者だけということで、乾杯と食事をしながら、自己紹介。

越王殿

魯迅記念館

３月２６日　寧波市へ、今日は朝から小雨、バスで高速道路を約３時間、まずは寧波経済技術開発区招商局（ＮＥＴＤ）で張副局長の説明を受け、２時間にわたる質疑。やがて上海との間に海上４０km の杭州湾跨海橋が２００６年完成する予定という。そうなると上海、杭州、寧波の三角地帯が結ばれる。

なにしろ住んでいる農民の土地を（土地は国有）工業団地に指定し、農地を工業用地に変えてしまうのだから話は簡単。農民は、というと集団住居地（マンション）に移住させ、技術研修をして企業で働く道を用意するという。多分その方が収入もあり、不満はないらしい。（このあたりの実態はよくわからない）　京都市の向島団地が一挙に３０も５０も建設されていくような規模だから（それも抵抗なしで４～５年で）ただ驚くばかり。

杭州湾跨海橋完成予想図

外国企業誘致では、企業所得税は１５％、２年間無税、その後３年間は１／２。

中国の国家的巨大事業　2008 年北京オリンピックと 2010 年上海万博に向けて

☆西部大開発 4 大プロジェクト

(1)南水北調…南の水を北へ(3 本の運河を北へ)

(2)西電東送…西の電気を東へ(三峡ダムほか)

(3)西気東輸…新彊の天然ガスを上海へ(4167 ㎞)

(4)青蔵鉄路…ゴルムドーラサ間(1118km)の鉄道

☆高速鉄道……北京＝上海間約１３００キロ(新幹線方式ならフランスか日本か?)

昼食は張副局長による歓迎会、その後寧波港の巨大コンテナ基地へ向かう。数万トンのコンテナ輸送船に次々とコンテナ運搬トラックが横付けになると、あっという間に巨大クレーンで船上へと積み込みが終わる。すると次のトラックが。この間約４０秒間。昨年の輸送量はコンテナ５００万個というからすごい。

次は寧波中策電子有限公司（株式会社）を訪問、長岡京市の会社とも提携しており、出来上がった製品はＯＥＭ（委託生産）で日本の製品として輸出されている。製品はトランス、オッシロスコープ、携帯用噴霧器、直流交流インバーターなど、ベルトコンベアーで流れてくる部品を手作業でハンダやネジ止めなどきびきびとこなしていく。かつて日本の工場現場で得意としていた人海戦術による生産ラインを見ながら、私のこどものころの児島（岡山県）の学生服製造のミシン工場を連想した。今や日本では見られなくなった労働集約型の現場がここでは主流となっていた。

夕方ホテルに到着、寧波市人民代表大会常務委員会副主任張氏の歓迎を受ける。別室に移動、歓迎晩餐会。大西先生の通訳で張副主任と名刺交換。中国側は誰でも「おっ！共産党か」という反応。大西先生は「日本共産党は京都市では第二党です」と紹介してくれた。食事の後、ホテルを出て夜の街を散策。時間が早かったこともあり、コンビニもスーパーマーケットも開いていて、ミニ電動バイクは２０００元程度（約２５０００円）こちらでは電動自転車と電動バイクが本当に多い。

＜中国社会の急激な変化　労働力・電気・水・土地がない！＞

公務員や会社員の場合は医療・失業保険は近年かなり保障されてきたといわれている。しかし農民の場合は郷・鎮（町村にあたる）単位の違いはあると思われるが、確立された制度はないようだ。問題は市内人口のなかで「流動人口」。農村からの「出稼ぎ」のようなものらしいが、寧波市で１４０万人。

この人たちには戸籍の登録ができないために公的な保障はない。最近は所得格差是正を打ち出した政府の農村重視の方針により、「地方で農業その他に従事しても収入がある」ということで、相対的低賃金の流動人口が減少傾向にあるという。そのこともあって「年間１０％程度の最低賃金のアップ」が進行している。

寧波招商局資料でブルーカラー（単純作業）の賃金は年１万５千元（２０万円弱）。業種によっては「人が集まらない」といったこともあり、今や中国企業自体が低賃金労働力を求めてベトナム進出に乗り出している、というから日本⇒中国⇒ベトナムといった階層構造ができあがりつつあるという話。

電力不足も急増する工業開発区と都市人口の増加で、火力発電所建設は進んでいるが間に合わない。「企業に自己責任（自家発電＝コストがかかる）をお願いしたり、土・日出勤に切り替えて平日を休業に」ということで対応しているが、昨年も停電が発生している。広い国土でいくらでもある土地だが、上海など都心部は値上がりが激しいという。

３月２７日　日曜日。したがって公式スケジュールはなし。午前８時出発、まずは阿育王寺、アショーカ王によって仏舎利（釈迦の遺骨）が８４０００に分けられ、それを祭ったという言い伝えの寺。鹿ケ谷法然院に「模倣江州阿育王塔」があるが、これは近江、滋賀県にある阿育王塔を模して建てられたといわれている。そして日本にきた仏舎利３体の１つが近江の阿育王塔といわれている。

阿育王寺

あちこちの伽藍を見た後、いよいよ仏舎利を拝観できるということになって、一番奥の伽藍に通される。３拝のあと順次台の上に置かれた小さな灯明のようなガラス製の容器の下側から覗き込むと、鐘を下から見るような形で、その中心に線香の芯のような点が１つ。僧侶の説明によるとそれがありがたい仏舎利だという。もちろん場内はカメラ厳禁。両側の収蔵庫には「欽賜龍蔵」と書かれた銘盤がはられており、鍵をあけて開いてくれた。きくと当時の皇帝から賜った経典で三蔵法師が持ち帰ったすべての経典が収められているという。「文化大革命のとき、紅衛兵が暴れたが、ここが軍隊の本拠地であったので難をまぬかれた」ということであった。鑑真和上像の祭られた伽藍もある。

天童寺

次の訪問は天童寺。山の斜面に大きな伽藍が幾重にも重なり合うように建立されており、なかには雪舟の修行した伽藍も。最澄が若くして中国（当時の遣唐使）にわたり、悟りをひらいたのもこの天童寺である。

寧波市内にもどって昼食。午後は 1840~42 年のアヘン戦争、84~85 年の中仏戦争(清仏戦争)、そして 94~95 年の中日甲午戦争(日清戦争と続いた戦乱で矢面にたたされた寧波港の入り口の砲台を見学。海防歴史記念館を訪問。

杭州へ移動　バスの中で、中国人民対外友好協会の黄先生から挨拶があった。北京から同行してくださった黄先生だが、現地の機関との対応がすべてうまく行ったのは先生の働きのおかげということを改めて認識させられた。参加者へ黄先生から贈り物は中国京劇のお面のミニチュア。

さて夕食の後ホテルに到着。チェックインのあと街を散歩。これまでの紹興、寧波とはまたちがう街の雰囲気に気づく。第一、ここでは３輪人力自転車や小型３輪バイク等が見られない。夜の商店街をあるく女性もスタイルがグンとよくなってきまっている。車も洗車がいきとどいていて清潔な感じの街である。望湖賓館というだけあってわれわれの部屋はすべて西湖に面している。夜霧でかすむ街並みは春の宵のムード。

３月２８日　日本企業トーセを訪問　今日は午前中は杭州進出のトーセで星明信副総経理の説明を聞く。本社は京都にあるが、ソニーのＰＳ２（プレイステーション２）のゲームの中身をつくる作業をしている。「なぜ杭州か？」との質問に対し「上海は人件費、土地ともに条件が厳しく、杭州には浙江大学や中国美術学院もあり、感性をもった卒業生が多い。人件費は月３０００元程度」とのこと。星さんの家族は上海住まいで、土、日は上海で家族と過ごす。日本人学校が杭州にはまだ開設されていないから、という。ところでゲームの画像処理などはもちろんパソコン画面を見ながらの作業で、できた製品もインターネットで日本本社に即座に送れる。

「輸出関税がかからずいいですね」というと「でも製品をＤＶＤに焼き付けて当局に申告しないと、本社からの開発費振込みが受け取れません」とのこと。

浙江大学訪問、丁度院生の終了証書授与式が行われており、にぎやかに記念写真をとっていた。

浙江大学は北京大学、清華大学に次ぐＮＯ３に位置する大学で、広さも５３３㌶、学生数も４万２千人を超える規模で（院生を含む）、日本の京大、阪大、早稲田など多数の大学と協力協定を結んでいる。

正門を入ったキャンパスには巨大な毛沢東像が。

西湖観光、昼食の後、遊覧船に乗って５０分、ゆっくりとしたクルーズ。

霊隠寺では崖に彫られた仏像、本堂では丁度法事が行われていたがとにかく参拝者が多いこと。

Ｔさんの話では数年前にきたときはこんなに人は多くなかったという。

最後は買い物に立ち寄る。お奨めはお茶。

西　湖

霊隠寺

商店街にはＫＦＣも

レストランで夕食の後ホテルへ。街へ出かけ昨夜メドをつけていた理髪店へ。お姉さんが３人、にこやかに「１５０元」というので椅子に。簡単に整髪がおわると肩をもみながら「マッサージ、プリーズ」といっておくの部屋を指差す。「NO、THANK-YOU」といって店を出たが１５０元というのはそれも含めた料金ではなかったか。残念。

まとめの作業が終わって１２時、さあビールを飲んで、と冷蔵庫をみるとビールがない。補充してくれていなかった。ホテルのレストランは終了、しかたがないので夜中の街に出て「串肉」とかいてある売店（街の飲み屋）で「ビールあるか？」とたずねると西湖ビール（ビン）がなんと３元（４０円！）ただし冷やしてない。これを飲んで就寝。明日は帰国。

３月２９日　今日はいよいよ帰国。午前中は杭州市対外貿易経済合作局訪問。
女性の李玲副局長の説明は自信にあふれたもの。帰国して日経新聞２９日の全面公告で「上海に続く長江デルタ経済圏のハイテク産業都市『杭州』」を見て、その意気込みを感じたが、日本のテレビコマーシャルも登場している。これからも中国は目が離せない隣国ということになろうか。

帰国して考えたこと「日経ものづくり」を読んでいると現地進出の企業で日本人支配人と現地幹部や従業員とのギャップは、法制度や生活習慣の違いだけではないことがわかって興味深い。
ところで、こちらから中国の現場を見てきたわけだが、中国側は我々日本視察団をどのように見ていたのだろうか？政治やスポーツなど、経済交流との関わりでも真の友人・隣人としての付き合いのあり方が問われていることを強く感じた。

今回の視察旅行での優れもの
今回の旅行には PENTAX の Optio-mx4 を携えていった。

　デジタルカメラとムービー（音だけの録音も可）両用で、１０倍ズームと画質も優れていて、値段も３万円を切る。しかもポケットに入る。電池容量も十分。外国旅行にはとても重宝。

＜参考文献＞中国経済ハンドブック 2004、台湾ＩＴ産業の中国長江デルタ集積（関満博）メイドインチャイナ（黒田篤郎）、対中企業進出の現況と問題点（編集・大西広）、京大上海センターニューズレター2004、中国の経済発展、他